

「不条理の中で神を見た人」

ヨブ記 第42章 1節～6節  
ヨハネによる福音書 第12章 44節～47節

説教 本庄侑子 伝道師

ヨブは「義人」として有名です。子どもにも恵まれ、財産も与えられ、人生は順風満帆のはずでした。ある日、ヨブが義人でいられるのは全てにおいて恵まれているからだとしてサタンが主張しました。神はサタンに、ヨブに災いを下すことをおゆるしになります。ヨブは財産、子、健康を次々と奪われ、ひどい皮膚病にかかりました。しかし、ヨブは神に信頼し続けました。

そんな中、ヨブの3人の友人がやって来ます。友人たちはヨブの変わり果てた姿を見て言葉を失います。こんなことになるくらいだったら生まれてこなければ良かったと嘆くヨブに対して友人たちは『神に従う人は祝福され、神に逆らう人は滅びる』という伝統的な神理解を語ります。ヨブ自身も納得してきたはずでした。しかし、原因不明の苦しみにのたうちまわる今、それらはやるせなさを激しくさせるだけでした。ヨブは友人たちと激しい論争を交わし、怒りの矛先を神に向け始めます。これまで決して口にしていなかった神を裁き、憎む言葉を次々と口にします。その間、神は沈黙したままでした。

神が長い沈黙を破ってお語りになったのは、ご自身の創造のみわざでした。ヨブが一番聞き取った苦しみの理由は一切お語りになりませんでした。ヨブは答えます。「わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います。」(5節、6節)この「見る」は、「経験する」と言い換えてもいい言葉です。これまで神について教えられてきた知識が実体験として迫ってきたのです。「みずから恨み」は新共同訳では「自分を退け」で、「崩れ、溶け去る、うみが出る」という意味があります。生ける神を経験させられるやいなや、自分自身が真っ向から崩され、うみが出るようにして崩れ、溶けてしまったのです。

不条理だ、納得がいかない、そう言う時の主語は結局、人間です。ヨブが持てるもの全てを奪われ、存在の根底がむき出しにされるような姿に成り果ててついに露になったのは、「義人」ヨブの中に隠れていた罪でした。さらには、ヨブと神との間には幾層もの壁があったのではないのでしょうか。神についての知識という壁によって生ける神が閉じ込められてきた。伝え聞

いてきた正しさや正しい祈りという壁によってヨブ自身も閉じ込められてきた。

神は言われます。あなたもヨブになっていないか。居場所を失ってきた本当の叫びがあるのではないか。述べてみよ。私の前で泣いてみよ。叫んでみよ。私はあなたの神ではないか。ヨブが見た神の姿は、ヨブと向かい合い、罪の隔てを打ち破り、ヨブの奥底にある叫びを聞きあげて本当のヨブと出会い、共に生きようとしてくださる、そんな神のお姿でした。

神は「義人」ヨブを、神の前で心を注ぎ出して生きる人へと解き放たれました。そして、ヨブが苦しみの中で失った以上のものをとお与えになりました。しかし、失った子どもたちは帰ってきません。ヨブの心には癒えない悲しみが残ったはずで、苦しみについての神の答えもいただけないままです。それらを抱えたまま生き続けなくてはなりませんでした。

「わたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのである。」(ヨハネによる福音書14章44節～45節)死から復活された主イエスの手には釘付けにされた時の釘あとが、わきには槍で突かれた傷跡も残っていました。ヨブの癒えない悲しみを神は放置なさらなかった。キリストが癒えない傷を負った姿で死から復活させられ、弟子たちの前に現れなされた。私を見よ。この傷跡を見よ。私はあなたの悲しみを知らない神ではない。私があなたの神だ。私についてきたらいい。キリストを通してそんな神の姿を見るのです。

礼拝は、私たちも神を見させていただく場所です。押し殺してきた叫びが解き放たれ、神に向かって祈る中で、私たちを罪から救うために釘で刺し通された方、そして、その釘跡が残る姿で復活させられたキリストのお姿を見る。そして、自分自身が溶け去り、新しくされた姿で、またここから生き始めます。奥底に癒えない悲しみが流れ続けていても、神が知っていて下さり、それらと共に生きていっていいことを知ったから。神にぶつかるようにして祈りながら、私たちを愛しておられる神、私たちの思いをはるかに超えた仕方で働いておられる神を見て、神と共に生きていくのです。

(記 本庄侑子)